
ああ、我が愛しの学園生活

．．．

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ああ、我が愛しの学園生活

【著者名】

N1602N

・・・

【あらすじ】

学園大好き超絶美少女の（元）生徒会長と、主人公が七不思議巡りをすることになりました。

更新は書き溜めがなくなるまでは週1、なくなつたら2週間に1回を目標にしたい。

タグに「七不思議」、とつけてますが、あまつ怖くはないともおもいます。

一応ギャグを田端しているので。

プロローグ（前書き）

処女作です

よろしくお願いします

プロローグ

「私はこの学園が大好きだああああああああああああああ！」

深夜2時ごろ、学校の屋上で一人の女の子が叫んでいた。

腰まで届きそうな長い髪、藍色のセーラー服、黒のハイソックスに黒のローファー。

全体的に暗めの服装だ。

そんな彼女はもう一度叫ぶ

「私は学園が大、大、大好きだああああああああああああああ！」

皆様は5月病というのを「存知だろ」つか。

主に新入生や新入社員に起こりやすいと聞いている。

新しい環境に慣れないうちに5月にある連休 ゴールデンウイークによつて緊張から解放され、その後学校や職場に行くがなじめない、そして憂鬱になる。

それが5月病。

だが、これはあくまで5月病になる一過程に過ぎない。

しかも無責任な話しだが昔友人から聞いたうろ覚えの情報だ。

さて、何故俺が5月病について語りてるかといつと、それは僕が5月病だと勘違いされるからだ。

この春、俺は高校生になり、いまは1ヶ月が過ぎたのだが・・・・
・イマイチやる気がない。

親や友人はこれを5月病というが、俺は違うと思つ。

別に憂鬱な訳じゃない。やる気が出ないだけだ。よく、学生が考える「勉強したくなー」というやつだ。

言い換えるとただの逃げ。

そして俺は授業から逃げ出した。

さうに言ひ換へるとただのサボリ。

サボるとこ'えば屋上。

そんな安易な考へで屋上に来て空を見上げながら疎忽について考
えていた。

「あー暑い」

まだ、涼しさが残る5円といえど、直射日光に数十分当たつてると
流石に暑い。

ひとつだけ外していたワイシャツのボタンを全て外す。
中からTシャツを着てるのと、そのまま脱ぐ。

「おーおこなこの少年。女子の前で突然脱ぎたすのはどうかと思つ
ぞ?」

後ろから少し高めの声が聞こえた。

振り向くと、腰まで届きそうな長い髪を持つ美少女がいた。

「こつからいたんだ？」

「ん、今さつきだ。授業が速めに終わったのでな、少し息抜きに屋上に来てみたのだ。

そうゆう少年はサボリか？」

「まあ、そんなもんです」

「少年。サボリはいけないぞ。クラスメイトや先生はウザイかもしない、だが授業というものは学生の時にしか受けることは出来ないのだ。今出とかないともつたいたいないぞ」

そのあと少し一ヤコとして

「もつたいたいオバケが出るかもしねないぞ」

と、小さこ子に使うような脅しをしてくる。

「生憎、俺は幽霊とかは大丈夫な部類でしてね。」

かるーくあしらつと、流石に相手も冗談だったのか気にした様子はなく、また話しあじめる。

「まずは、我が愛しの学園に入れたことに誇りをもて。

私は誇りを通りこして愛している。ものすごく愛おしい。校舎だけでご飯3杯はいける。

私の弁当にはご飯と梅干しだけなんだ。一般的に日の丸弁当と呼ばれるものだな。

だが、日の丸弁当とは梅干しをおかずにしてはんを食べるのであって、

私は校舎をおかげに「はんを食べている。よつて、私の弁当は日の丸弁当ではないのだ。」

ビシッといひに指をつきだし決めポーズ。

だが、話しがズレている上に、結論が「日の丸弁当ではない」なのだ。

いくら決めポーズをしてもカッコ悪い。

あと、個人的にはやっぱり日の丸弁当だと思つ。

なんて答えればいいのか分からずに、ぼーと先輩を見てた。
まづげなげー。

「ふふつ私の言葉に感動して言葉も出ないか。少年、今からでも授業に出たまえ。まだまにあつ。そつだ、少年に学校の良さを語つてやうう。そつすれば授業をサボるどころか、ボランティア活動をし始め部活、生徒会と学校に貢献しそれだけでなく学園の良さを皆さん広め初めるだう。さすればこれから『キーンコーンカーンコーン』むつ、もう授業か。

仕方ない。また今度にするか」

クルツと回つて僕に背を向ける。その時に髪がふわっと広がり、とても綺麗だった。

彼女がいなくなつた屋上は異常なほど静かだった。そういうば、さつきの鐘は予鈴ではなく、授業終了の鐘だつたと教えた方が良かつたのだろうか。

そんなことを考えながらまた空を見上げる。やる気なんかは微塵も出てこなかつた。

彼女には悪いがあと1時間はサボらせてもらおう。

プロローグ2

チャイムと共に一日の授業が終了する。

帰るために下駄箱を開けると一枚の紙が入っていた。

『放課後屋上で』

女子っぽい丸い字で書いてあるひとこと。

「、これはあの有名なラブレターというものではないか。

全男子の憧れ。

青春を勝ち組へと導くリアアイテム。

普段の俺ならラブレターを見ただけで「リア充爆発しろ」と叫びながら自分に来たなら別だ。

ヒツヒツフー、ヒツヒツフー

テンションを下げるため少し深呼吸。

この時、違和感を感じたが気のせいだろう。

手紙には放課後というアバウトな時間。もし俺が行かなかつたらず

つと待たせてしまつかもしれない。

折角ラブレターをくれた子を待たせるなんてことは絶対してはいけない。

すぐにも屋上に向かはなければ。

屋上に着いた時、1番最初に田に入つたのは長い髪だった。
よく見ると、その髪の持ち主は今日会つた学園大好き美人さんだつた。

「やあ少年、また会つたな。

ま、私が呼び出したのだから当たり前だがね。」

「この手紙つてあなたが書いたんですか？」

人差し指と中指で紙をはさみちょっとカツコつけてみると。
特に意味はない。

「ああ、その通りだ。ちょっと話したいことがあつてな

「もしかして、昼の続きですか？」

「それもいいが・・・」

こっちに近づいてくる。

大股で5歩。

たつたこれだけで物凄く近い距離になる。わかりやすく言えばもう少しでキス出来そうな距離。

ピンクの唇、大きな目で長いまつげ。

破壊力は凄まじい。

「あんな、私と付き合つてほしこんだ」

点、

てん、

テン、

テーーーン！

はつ！

思考が停止してしまった。

よし、よく考えてみよう。

今日の3校時の終わり頃、初めて会った人に付き合つてと言われる
ほど顔がいいとは思えない。

漫画や小説の主人公だったら無自覚イケメンが多いが、残念ながら
そんなことはない。

ま、不細工ではないとは思うがな。ただ、それは俺が平均なだけだ。
人間、普通ぐらいがちょうどいいんだ。

「おー、返事はどうなんだ」

腕を掴んで更に接近していく。
むね当たつたあああああ！
心の中で叫んだ。

「え、えっと。取り合えずビビりですか？」

俺の質問に顔を赤めるわけでもなく、「バカ・・・／＼」なんて可愛い反応をしてくるわけでもなく、更にいえば「この天然めつ！」等と怒られるわけでもなく、

昼間会つたときと同じ笑顔で

詳しく述べと悪戯つ子みたいな顔で

「七不思議巡りだ」

と、いった。

はあ、そうですよね。
こんなフツメンがこんな美人に告白されるなんてありませんよねーー。

「 もううん、いいですよ」

取り合えず、これが告白でなくともこんな美人の隣にいれば幸せだ。

断る理由なんてあるはずない。

」の口から俺と先輩の学園生活がはじまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1602z/>

ああ、我が愛しの学園生活

2011年12月5日20時54分発行